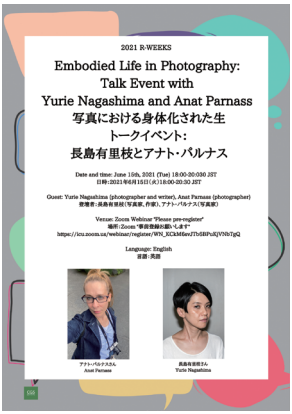


イベント報告

写真における身体化された生：長島有里枝とアナト・パルナス

コーディネーター：
レティツィア・グアリーニ
（CGS研究所助教）
岡俊一郎
（CGS研究所助手）

2021年6月15日に国際基督教大学ジェンダー研究センターは、第9回R-Weeks関連イベントとして写真家の長島有里枝氏とアナト・パルナス氏をお招きし、ウェビナーを開催した。R-Weeksとは、ジェンダーやセクシュアリティに様々な形で関連する一連のイベントをジェンダー研究センターが開催する特別週間のことである。本イベントのテーマは写真と身体であり、長島氏とパルナス氏はとりわけ妊娠、出産、育児に焦点を当てた講演を行った。イベントでは、ゲストおよびイベントの背景説明ののち、長島氏とパルナス氏がそれぞれの講演を行い、来場者からの質疑への応答の時間を設けた。

このウェビナーには、65名ほどが参加した。日本のみならず、オーストラリア、イスラエル、イギリスからの参加者もいた。イベントは英語で行われ、長島氏の発言のみヒントン実結枝氏によって日本語から英語へ通訳された。

このイベント報告では、長島氏とパルナス氏の講演を要約、編集、翻訳して伝えている。講演では多くの写真が用いられたため、雰囲気を追体験するためにも、長島氏とパルナス氏のウェブサイトや作品集・展覧会カタログを参照することで本報告を補っていただけると幸いである。

長島有里枝は、写真家、そして作家として活躍している。1993年に武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科在学中に自身の家族を撮った作品が「アーバナート #2」展でパルコ賞を受賞しデビューした。卒業後、1999年カリフォ

ルニア芸術大学ファインアート科写真専攻修士課程修了、2015年武蔵大学人文科学研究科博士前期課程修了。主な受賞歴に、第26回木村伊兵衛写真賞（2001年）、第26回講談社エッセイ賞（2010年）、第36回写真の町東川賞国内作家賞（2020年）など。2020年に24年分のセルフポートレイトを集めた写真集『Self-Portraits』がアメリカで出版された。同じく2020年に『「僕ら」の「女の子写真」からわたしたちのガーリーフォトへ』が出版された。

長島有里枝です。こんにちは。今日は、2000年ごろから最近までのわたしの作品についてお話ししたいと思っています。2002年に出産し、「母親」になってからの作品です。自分の生活が変わったことによって、作風も変わったと思います。

まず、初期の写真作品を紹介します。これはわたしがまだ20歳だった頃に、家族と一緒に撮影したヌードの写真です。これらの写真でデビューしたのですが、今回の講演では、こうした作品についての説明は割愛します。キャリアの初期から、セルフポートレート、家族、友人などの写真を撮っていました。2020年に出版した『Self-Portraits』（Dashwood Books）という写真集に、なぜわたしがセルフポートレートを撮っていたのかについて、1990年代の文化的な背景について説明しながら論じた文章がおさめられていますので、興味があれば参照してください。

2002年に子どもを持ちました。写真集には、妊娠中のセルフポートレートもあります。若いころから、自分の身体が社会からどのように見られているかに関心があり、多くのセルフポートレートを撮ってきました。昔から「家族」という社会集団、家父長制のようなものを背景としたシステムに息苦しさを感じてきました。ですので、そうしたものをテーマにした作品を多く制作してきました。

日本では1990年代に、法律的には男女の平等がかなったといわれていました。男女雇用機会均等法などが代表的な例です。わたしも、そういう一般的な言説を信じていたところがありました。自分は男性と対等に働けるし、写真家としても対等にやっていけるだろうと思っていました。

けれども、子どもを産むことで初めて、そうした信念が幻想だったと知ることになりました。子どもを産み、出産から3年目にはシングルマザーになりました。

生活自体が、地理的にも時間的にも制限が大きくなったと感じました。家の中で撮影した作品がもともと多かったのに加え、常に子どもの世話をしなければならないので、家で撮った子どもの写真が増えていきました。息子は鉄道が大好きだったので、外の写真は電車に関するものが増えました。鉄道の写真集を出せるくらいは写真があると思います（笑）。

最初の2・3年は本当にどうしようという気持ちでした。（写真スライドを見せながら）たまたま家の中でみつけた玉ねぎが女性の乳房に似ていたので、玉ねぎを裸の胸の前で持った写真を撮ってみたり。家の中でも意外にドラマチックなことはおこります。例えば、この写真のように、アイスクリームについてきたドライアイスを流し台に捨てた時の様子はとても幻想的です。

子どもができて一番大きかった変化は、写真を撮るためにどのように時間を使うかを考えなければならないことでした。写真を撮るためには、子どもから離れなければならないので、作品はドキュメンタリー的なものからセットアップ写真など、よりコンセプチュアルなものへと変化していきました。例えば、インターネットでモデルを募集して、それぞれに面識のない人たちをある日時、ある場所に全員呼んで、「家族写真」を撮るということをしました。家族がテーマではありながら、手法を変えて、家ではないところで撮るといったことが増えてきました。

もうひとつ、わたしが子どもを産んで興味を持ったのは、別の女性の人生についてです。2004年に制作し2005年に展示をした「千人針」という作品があります。この作品は、第二次世界大戦中に女性たちが、男性の家族を戦地に送り出すときに持たせた腹巻きの作り方を自分のシャツで再現してみたものです。当時の女性たちは、街角に立って通りすがりの人に呼びかけたり、近所の女性に頼んだりして、1000針分の縫い目を施した腹巻きを出征する男性に持たせていました。わたしも660名ほどの方々に縫ってもらいました。なぜ1000名でないかというと、寅年の女性は年の数だけ縫っていいということになっているからです。

息子の保育園の隣に建っていたデイケアセンターに通う女性たちを訪ね、聞き取りをしながらビデオを撮影しました。彼女たちによると、千人針は自分たちの息子や夫が生きて帰ってくるように、という祈りを込めて作られました。千人針に使われた「玉留め」という縫い方が、「弾を止める」と信じられたからです。

これ以外にもいろいろなげん担ぎが盛り込まれました。それらは迷信ですが、選挙権を持たなかった彼女たちが戦争に対抗する手段は本当に限られていたんです。展示の際には、660名の女性の顔と縫っている様子を写したポラロイド写真を展示しました。その際、これらの人々とは戦争について語りあうということをしました。

ちょうど妊娠している時に、アメリカで同時多発テロ事件が起こり、息子が生まれた年にアフガニスタン戦争が始まったことで、「これはひとごとではない」という思いが強くなりました。子どもを持つことで、自分には直接関係ないかもしれないけれども、子どもの未来に関係することがテーマに入ってくるようになりました。

仕事をするときには子どもを預けてきたのですが、2007年に初めて、彼と一緒にスイスのアート・レジデンシ―・プログラムに参加しました。そこでは、わたしが14歳の時に亡くなった祖母にまつわる作品を制作しました。すでに20年以上の時間が経過していましたが、2007年にちょうど祖父が亡くなり、彼の家から祖母の遺品がたくさん見つかったのです。そのなかに、祖母が撮影した花の写真の箱を発見してとても驚きました。祖母の写真からは、強い情熱が感じられました。けれども、彼女は生涯、主婦として過ごしました。活発な女性だったので、おそらく、わたしと同じ時代に生きていれば仕事を持っていたと思います。祖母の写真を見て、写真家になれた自分と、祖母の人生を分けたものは何だろうと考えさせられました。

スイスでは、祖母がやっていたことはなんだったのか、意味がなかったことなのか、人から認められるということだけが「成功」なのかといったことを考えました。祖母の気持ちが知りたくて、彼女が撮った写真を壁に貼って眺めながら、自分も花の写真を滞在先の庭で撮ることにしました。その作品は、『SWISS』という写真集になりました。

ここからは、少し時間が経ってから参加した2014年のグループ展「拡張するファッション」展についてお話しします。この展示がきっかけとなって、そのあとたくさんの個展をすることになったとわたし自身は認識しています。この展覧会には、祖母が使っていた鏡台の鏡と、フィルム送りを失敗して像が二重になり、たまたま縦横比が鏡と同じになった子どもの写真を引き伸ばして並べた作品

など、普段は失敗だと考えられる写真をいくつか作品化して、出品しました。

子どもを育てることで、様々な挫折を経験してきました。例えば、もう他の人と同じ時間だけ働けないし、作品の数も減って、収入も減っていってしまうといったようなことです。わたしにとって、子どもを持つことは幸せであると同時に辛いことでもありました。辛いのは、社会の構造がおかしいせいだとずっと思っています。このときは、何が変なのかを問いかける展示にしたいと思っていました。そんなふうに子育てが苦しい必要はないと今でも思っています。この社会で欠点だと思われていること、例えば人並みに働けないことや、子どもがいて時間が自由にならないこと、そういった制約を違った目で見ることはできないかと思ってきました。誰かのために無償で働くことを、障害や能力のなさと見るのではなく、もっとポジティブな行為として捉え直せないかということです。

写真をフレームに入れる際に写真の前に置かれるアクリルは、わたしにとって鏡のイメージです。もし、わたしが「巨匠」であれば、反射しないアクリルを使用できるんですが、実際には、そうした額装代を払う予算もなかったりします。そのため展示に際して、額を美術館から借りなければなかったのですが、それはヨーゼフ・ボイスのポスターのために作られた一点物の額でした。彼は「巨匠」ですから（笑）。

写真をベタ焼きした際に、うまく像が映らないことがあるのですが、そうした作品も現れてきたままに、濃度や色を調整しないで展示しました。鏡台には、祖母を思って撮った花の写真を乗せました。この作品の中のバラは、ヨーゼフ・ボイスがよく利用していたバラの花を意識しています。展示会場では、荒木経惟さんが最初に作った写真集、『センチメンタルな旅』の表紙のアプロプリエーションとして、息子と撮影した入学式の記念写真を横に寝かせて展示しました。

子どもが成長すると、生活の場でも写真が撮れるようになっていきました。2016年に行った「家庭について/about home」展の中では、怖い写真、家庭という言葉から一般的に連想されるものとは少し遠いイメージの写真を展示しました。意外と家庭って怖い場所です。料理をする際にちょっとした火がおきたりしますし、ナイフがおいてあったりもします。料理をしながら本を読みたくて、ネギで本をおさえている写真もありました。これら日常の場面を写した写真は、展示会場の中に置かれたテントの後ろの壁に展示されました。

このテントは、母と一緒に作ったものです。当時、母は70歳になったところで、なぜかしょっちゅう、わたしを産んでいなければ自分はパリでお針子になる夢を叶えられたはずだという話をしていました。人生に後悔のようなものがあるんだろうというのは、一人の女性として想像がつきます。母とはずっと良い関係を築いてきたわけではなかったので、昔話をするぐらい歳をとったけれどまだまだ元気な母を、もっとよく知っておきたい、和解しておきたいという気持ちで、このテントを一緒に作りました。母の夢を叶える意味で、プロとして彼女を雇い、仕事として制作してもらいました。

2017年に行われた「縫うこと、着ること、語ること」で、今度はパートナーのお母さんとタープを作りました。彼女はわたしの母とほぼ同じ年齢です。神戸のアーティスト・イン・レジデンスに参加することになり、神戸在住の彼女と一緒に何か制作できないか相談をしていたら、彼女の若いころの夢がわたしの母とまったく同じ、お針子になることだったとわかり、このアイデアを思いつきました。当時、それが流行っていたんでしょうか。この展示で使った布は、神戸市内に居住している女性たちから集めています。人づてに、もう着られないのに捨てられない服を持っている女性を探し、その服を作品の素材として提供してくれるようお願いしました。代わりにわたしは、その服を着ている女性たちの写真を撮影して、プリントを一枚あげる、という物々交換がコンセプトでした。

2018年にちひろ美術館・東京で行われた「作家で、母で　つくる　そだてる」展では、初めて息子の写真をきちんと展示しました。子どもの顔を公開するのは怖いし、母親だからといって、勝手に写真を使っていいんだろうかと思っていたので、子どもが高校生になり、「お母さん、いいよ」と言うまで待っていました。

横浜市民ギャラリーあざみ野で2019年に行った展覧会「知らない言葉の花の名前　記憶にない風景　わたしの指には読めない本」では、全盲の女性にお手伝いしてもらいました。壁には、2010年に出版した短編小説集の点訳を、わたしの家族が読もうとしている写真が並んでいます。協力してくださった、ICUの卒業生でもある半田こずえさんに、鑑賞してもらうことを考えて作った展示です。

最後にお見せするのは、2019年にわたしの祖母の故郷である群馬県高崎市にある、群馬県立近代美術館で行った「まえといま」展のスライドです。この展覧会は、高崎市在住の作家、竹村京さんとの二人展でした。高崎出身の祖母にまつ

わるさまざまなことが展覧会のテーマになっています。

美術館には群馬県立歴史博物館が隣接していて、ちょうどそのとき、博物館では縄文時代の土器の展示が行われていました。打ち合わせの際、隣の博物館をついでに見に行ったのですが、この展示に深く感銘を受けました。展示されている土器はすべて、無名の作者によるものだったからです。というより、縄文土器って、古すぎて作者を特定することができないんです。それらは、女性によって作られていたといわれています。後日、学芸員の方に聞いた話によると、そこで展示されるための要件は主に2つで、状態がいいことと、制作された時代の様式を顕著に示していることだそうです。その価値基準がとてもシンプルで、なおかつ面白いと感じました。壁を隔てたすぐのところに、このような素晴らしい価値観があるにもかかわらず、美術館の価値基準はもっと男性中心的なものであることをとても残念に思いましたが、だったら博物館の価値基準を美術館に持ち込んでしまおうと思いつきました。きれいな状態で残っている祖母の遺品を写真に撮ることでそれらをわたしが「所有」し、自分がアーティストであることを誇示するのに利用するのではなく、祖母の遺品をそのまま展示ケースに納めて置くことにしたのです。作家が描いたから「作品である」という考え方自体に、とても抵抗があります。それはとても傲慢なことだと思っています。他には、祖母が押し花作品に使おうと残していたドライフラワーを使って、フォトグラムという技法の写真作品や立体作品などの新作と、それまでに群馬県内で撮影した写真、『SWISS』など祖母と関係の深い旧作を、祖母の遺品と一緒に展示しました。

祖父の一周忌で撮影した家族の記念写真をお見せしながら、このプレゼンテーションを終わりたいと思います。ありがとうございました。

アナト・パルナスは、イスラエル出身の写真家である。1996年～2000年テルアビブ大学で日本学を専攻し、2000年～2004年テルアビブのカメラ芸術学校で写真を学びながら、イスラエルの新聞社『Haaretz』で働いた。2006年に来日し、日本大学芸術学部で国費外国人留学制度の研究生として学ぶ。2013年、同大同学部で日本における現代女性写真についての研究で博士号を取得した。主な写真展に、「Holga De Shinjuku」（2010年、Stork Gallery）、「Far Away From（Here）」（2011年、FOIL GALLERY）、「夜気（やき）」（2013

年、新宿ニコンサロン）などがある。最近『Haaretz』のアート特集号に長島有里枝の写真を紹介する記事を載せた。

まず、ジェンダー研究センターにこのような場を提供いただいたことに感謝いたします。以前から敬愛していた写真家の長島有里枝さんとご一緒できて大変光栄です。彼女は、日本の女性写真家の表現に注目したわたしの博士論文の主題でもあります。長島さんの作品との出会いは、わたしの日本の写真に関する認識や研究の方向性自体を大きく変えるものでした。

わたしは、イスラエル出身で、1995年に日本を初めて訪問しました。その訪問以降、日本はわたしの人生にとってとても重要な場所になっています。2006年に文部科学省の奨学金を得て日本に移りました。そして、日本大学芸術学部に入学しました。

まず、現在も進行中の作品である*Japan Diaries; Atomosphere of Detachment*（「日本日記：孤立の雰囲気」）を紹介したいと思います。そして、このイベントの主題へと移行していきたいと思います。*Japan Diaries*は、わたしにとって実際に日記という意味を持っています。2006年に日本に移り住んでからこのプロジェクトを始め、ほとんどの場合、携帯電話を使って写真を撮っています。書くことで自分自身を表現するということはわたしにとって非常に難しいことなので、わたしが世界をどのように経験しているのか、どのような感情や考えを抱いているのかを写真という手段を使って表現しています。このプロジェクトは現在進行中で、これらの写真はわたしが妊娠して変化していく様子も描いています。そして、子どもを持つことで、世界を経験するあり方も、写真を撮る方法も完全に変わってしまいました。

日本には長い間住んでいますが、いまだに日本の文化を十分には理解できていません。また、とても魅了される時がある一方で、とても不満を持つ時もあります。「曖昧」という言葉によって表される、日本の文化の不明瞭さによって、日本に長く住めば住むほど、この国について、この国の文化について、そして時に、そこに住む人々について理解していないという思いを強くします。専門的なカメラを使う時でもスマートフォンを使う時でも、わたしの写真は、このような「わからない」、「わかりたくない」という不満を感じたときに乗り越える助けに

なってくれます。

日本はとても写真映えする国だと言っていいでしょう。東京で初めて過ごした1年の間、わたしは巨大な迷宮に住んでいるような感覚を受けました。角をちょっと曲がってみるだけで、全く新しい世界を見つけることができるのです。力士や食事、電車などにも驚かされました。そして、小さな携帯電話で写真を撮り始めました。スマートフォンで写真を撮ることが普通のことになるずっと前のことです。ある意味で、幸運なことに、誰もわたしが何をやっているのかに関心など向けませんでした。なので、様々な人や状況をありのままにとらえることができたのです。

*Japan Diaries*のシリーズに含まれる写真のうちの1枚に、眠った子どもを写したものがあります。この写真を撮った時のことは、はっきりと覚えています。その時、わたしは40歳で、複数の理由から、子どもはいらないかなと思っていました。けれど、その写真を撮った時に、「わたしは本当に満たされていると思っているんだろうか。本当にお母さんになりたくないと思っているんだろうか」と思ったのです。わたしが妊娠する数ヵ月前にこの出来事は起こりました。

わたしが子どもを持ちたいと思ったのは、母になりたいと感じさせられる人に会ったからです。わたしは娘を愛しているし、母親になったことはこの上ない喜びと感じています。けれど、今でも、他の女性が子どもを持ちたくないと言っているのを聴くと、彼女たちに共感することができます。時に、子どもを持たないということは女性としての務めを果たしていないのだと考える女性と口論になることがあります。

母になるまで、毎年、夏に花火を撮りに出掛けていました。そして、*Fireworks*（「花火」）というシリーズを作りました。花火そのものに魅せられたというよりも、そこに集まって花火を見る人々、集団、そしてその場の雰囲気に魅せられたのです。

写真家として、光には非常に強く魅せられます。そして、これまで写真を夜の間に撮影してきました。それも、フラッシュや三脚は使わず、自然光だけです。暗闇のなかにも多くの光があることを知りました。夜、空を見て、家を出て東京とその周辺の写真を撮るんです。こうした写真の多くは、*Yakei*（「夜景」）におさめられています。

2015年までは、このような写真を撮っていました。もちろん、母になってからは、こうしたことはできません。実の家族と遠く離れた場所で暮らすシングルマザーとして、夜中に家を出て自分の機材と赤ちゃんを連れて街中をうろつくなんてできませんでした。その頃、先ほど述べたような写真を撮ることをほとんど完全に止めてしまいました。そして、そのことはとても腹立たしいものでした。これまで、インスピレーションを感じる、とても特別な環境の中で写真を撮ってきたのに、突然、こうしたインスピレーションが自分からはぎとられてしまったように感じました。子どもが保育園から帰ってきたとたん、自分の家を離れることができなくなります。家を刑務所のように感じる時もありました。子どもが生まれてから最初の2年間は、とてもとても大変でした。自由が剝奪されたようでした。時には、閉所恐怖症のようにも感じたのです。

今日の主題に移っていきます。今日の講演の主題について話している時に、妊娠や出産、育児の困難な部分に焦点を当てて共有したいと思いました。というのは、こうしたことについては、あまり多くの女性が語りたがろうとしないからです。

子どもを授かったということを知った日の喜びを言葉で言いつくすことはできません。けれども、同時に、既に出産するという考えに恐怖を覚えてもいました。妊娠している間、わたしは、必要な支援を受けることができませんでした。何度も自分が感じている恐怖について共有しようとしましたが、医師は「自然なことです。みんな、怖いと思うんですよ。うけとめないとだめですよ」と言うばかりです。妊娠はわたしにとって自然なことではなく、とても奇妙なもので、パニック状態にありました。妊娠中は、「どうやって、この子をわたしの体の外に出すんだろう」と考えていました。妊娠3ヵ月目で、耳鳴りが始まりました。おそらく、妊娠にまつわるストレスからだろうと思います。

体は変わり始めました。体のコントロールを失っていくように感じました。体がもはや自分のものではないように感じました。わたしにとって心地よいものではまったくなく、それを出産経験のある友人たちに伝えようとしましたが、彼女たちも理解してくれませんでした。そして、妊娠の間、「セクシーだと感じた」、「とても感動的な体験だった」と、彼女らが言っていました。残念ながら、わたしにとってはそうではありませんでした。まったく感動的なものではありません

でした。

こうした考えを伝えることができる人はほとんどいませんでした。わたしたちが生活する社会の中で、妊娠の間に起こる身体の変化について、ネガティブな感情を持ったり、セクシーだとも幸せだとも思ったりしない女性のための場所というのは全くないのではないかと思います。わたしも、こうした変化に慣れることができると思っていましたが、慣れることができませんでした。お腹が大きくなればなるほど、ストレスも増していったのです。

自分の身体と格闘している時に、日本は妊娠や出産とのかかわりでは、様々な意味で後進的だと感じました。わたしが妊娠を知った初期の段階から、無痛分娩を選択したいと思っていました。無痛分娩は日本ではいまだに一般的な選択肢ではありません。というのも、愛に満ちたお母さんになるには、苦痛を耐えなくてはいけないと信じられているからです。自分の身体に関して、自分以外の人間が決定を下すというのはとても嫌なことです。そして、医師に出産時に痛みを感じたくないこと、出産時の痛みに怖じ恐れることを伝えるのにとても苦労しました。

自分の体が変化していく様子を撮影するというのは、身体の変化を理解し、自分と自分の周囲に何が起きているのかを理解するための手段でした。妊娠初期の期間は特に大変でした。とても強いつわりのせいで、ほとんど動くことができませんでした。そして、わたしは一人きりだったのです。その時父を亡くしました。けれども、身体の状況が悪く葬儀に行くことができませんでした。

同じころ、妊娠する女性としての人生の一部であるような物に関する写真を撮りました。そして、時間を最も過ごす空間についても写真を撮り始めました。そう、病院と家の写真です。

少し楽になってきた時期に、イスラエルに行き、2ヵ月をそこで過ごしました。つわりが消えてからは、旅行を続け、自分が妊娠している様子をいろんな場所で撮り続けることを自分に言い聞かせました。これは、わたしが戦っていた不安を取り除くための方法のひとつでした。写真を撮ることは自分を助けてくれました。なので、日本中を旅しました。お腹は、どんどん大きくなり、いのちを持っているかのようでした。

わたしの娘を日本で育てることが、自分が直面するかもしれない言語的な壁の

面で、あるいは、文化的な壁の面でどのような意味を持っているのかを考え始めました。わたしの体は変化を続け、自分の中の怪物は動き始めていました。こうした感覚をどのように感じればよいのかわからず、子どもを産むという考えに恐れおののきました。

ついに、娘のアサを生む日がやってきました。わたしは幸せだと感じるべきだったのでしょう。けれど、実際は悪夢のようでした。子どもを取り出すまでにほぼ2日かかりました。その間、痛みを伴う出産と感じている恐怖、苦痛に関する写真を撮りました。母が一緒にいてくれました。分娩室につくと、わたしは三脚とカメラを用意し、自分がその部屋にいたほぼ48時間のあいだ写真を撮り続けました。

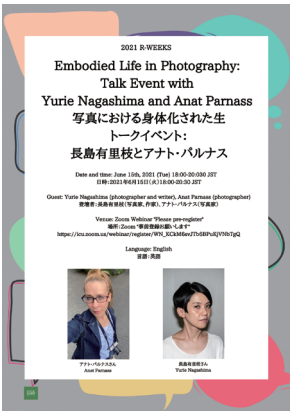
娘を連れて家に帰ってからも写真を撮りました。それは、まだ、「わたしたちの」家ではなく、「わたしの」家でした。娘とのつながりを作るには時間がかかりました。つながりをつくるのは、時間がかかるものですし、つながりができないときだってあるでしょう。

わたしはさっき述べたような写真を、妊娠について同じように感じている他の女性たちがいるからこそ撮りました。病院は9ヵ月もの間、定期的に診察をしてくれますが、女性たちが妊娠の間に、あるいは、出産を終えてから必要な精神的なサポートを受けることはまれなことです。母親になるとは過程であり、わたしにとっては、母になるということを理解するのに2年かかりました。時には、社会からの圧力に負け、迷子になったように感じます。ですから、お話ししてきたような写真を見せることができる場があること、こうした話題について議論をする場があるということはわたしにとって、とてもとても重要なことなのです。

母になった今、昔のように写真を撮ることは難しくなり、特に夜、インスピレーションのまま撮影することは難しくなりました。アサがまだ赤ちゃんの頃は、重い機材やカメラを持っての撮影は大変なことでした。そして、生まれてすぐに、小さな赤ちゃんと彼女の“道具”を持って家を出るには、もっと軽い（プロ用の）カメラを買わなければならないことに気がつきました。ある意味、アサを出産したことで私の写真はガラリと変わり、写真家としての自分を見つめ直さなければならなくなったのです。幸いなことに、高画質のカメラ付きスマートフォンが大きな助けになっています。写真に撮る対象も変わりました。

わたしの新しい写真のシリーズでこの講演を閉めたいと思います。4年間撮りためている、エレベーターに乗っている娘の写真です。

ご清聴ありがとうございました。



Event Report

Embodied Life in Photography: Talk Event with Yurie Nagashima and Anat Parnass

Coordinators: Letizia GUARINI
(Assistant Professor, CGS)
Shunichiro OKA
(Research Institute Assistant, CGS)

On June 15th, 2021, between 18:00 and 20:30, we welcomed photographers Yurie Nagashima and Anat Parnass to a virtual event hosted by the Center for Gender Studies (CGS) at ICU. This talk event was included in the 9th annual event "R-weeks," a project in which CGS holds open lectures and workshops on various topics, primarily in terms of gender and sexuality. Nagashima and Parnass discussed issues around photography and gender, with a focus on motherhood. The event included the introduction of the guests, background of the event, Nagashima and Parnass's lectures, and time for questions and answers from the audience. It was conducted in Japanese and English, and Miyuki Hinton was Nagashima's interpreter from Japanese into English. This event was open to the public: around 65 people participated, including some participants who joined our webinar from Australia, Israel, and the UK.

This event report revisits Nagashima and Parnass's lectures and has been condensed, edited, and translated. The material presented in the event included a great number of their artworks, which are not reproduced here. We recommend readers to refer to Nagashima and Parnass's websites and publications, including but not limited to exhibition catalogs and photobooks

mentioned in their talks.

Yurie Nagashima is a photographer and writer. In 1993, while still a student at the Department of Visual Communication Design at Musashino Art University, she made her debut and received the Urbanart award hosted by the Parco Gallery in Tokyo. In 1999, she completed the master's program at the Department of Fine Arts, California Institute of the Arts; in 2015, she completed the master's program at the Graduate School of Humanities, Musashi University. She has received the 26th Kimura Ihei Award (2001), the 26th Kodansha Essay Award (2010), and the 36th Higashikawa Domestic Photographer Award (2020). In 2020, she published the photobook *Self-Portraits* (Dashwood Books). Her monograph *"Bokura" no "onna no ko shashin" kara watashitachi no gārī foto e* (From their "onna no ko shashin" to our girly photo, Daifuku Shorin) was also published in 2020.

Hi, I am Yurie Nagashima. Thank you for coming. Today I would like to give a presentation with a focus on my work beginning from around 2000 to the present. Because I had my son in 2002, I would like to speak primarily about that time in my life after becoming a mother, as well as of my experiences as an artist being a mother. I want to focus on these themes because having a child changed my life conditions, and those changes were also reflected in my art.

I would like to start with some images from my early works.When I was around twenty years old and a university student, I created a series of photographs of me and my family. I debuted with this work of me and my immediate family in the nude, titled *Self-Portrait*. Unfortunately, today I will not go any further into this work because of time constraints but I wanted to show some images from my debut for which I got recognized. If you have the opportunity, I would like you to take a look at the pictures and writings included in *Self-Portraits* (Dashwood Books, 2020), where I discussed my motifs

and my interests as well as the cultural background of that time in Japan that drove me to create those works extensively in the mode of self-portraits.

I had my son in 2002. Some of my works are self-portraits of myself while pregnant. Since I was very young, I made self-portraits, often in the nude, based on my underlined interest in how women's bodies were perceived by the society. In addition to thinking about how the woman's body was commonly seen and sexualized, I was also interested in the family, specifically the family as a social structure within the patriarchal society. These are the themes that I addressed in my early works.

During the 1990s, the social structure in Japan changed and the legislation pushed women's rights very extensively. This was a revolutionary time for women. I was thus raised under the belief that as a woman I would have equal opportunities as men, not only in education but also as I grew older and began to work as a photographer. However, when I had my child in 2002, I was reminded as a mother that those were only ideals: the reality did not live up to the dreams I had about my society. This was paired with the fact that I became a single mother after three years of having my son. In the photographs from that time, you can see how the constraints that I was experiencing were reflected in my work: for instance, I was stuck at home and I felt that I had lost my mobility to go out and take pictures.

As a consequence, the subjects of my photographs changed, and while I had always been interested in depicting my family, after having my child I started taking more pictures at home purely because I was restricted to those subjects: my son and my life about raising him. Even when I had the opportunity to go out, I was always with my son and the only type of activity I could engage with him involved trains. Since he was such a huge fan of trains, whenever we went out, we would do something related to trains and therefore my photographs were filled with them. I am sure I could easily publish a photobook about trains (laugh).

The first few years of raising my son consisted of me stuck at home

wondering what to do with myself and thinking about what I could possibly do with my art and my photography. Some photographs from that time [included in the slides used for this presentation] show how I started using material that was available to me in the house, for instance, onions resembling women's breasts. In this way, I discovered that if I looked closely, there were dramatic events and subjects around the house that I could photograph, such as a sink filled with fumes from a piece of dry ice that came together with an ice cream that I had bought.

While many things changed after having my son, I think the most significant is that I had to figure out how to use my time to take pictures. I realized that I could only take pictures when I was not with him. This made me move from a documentary type of photography to a more staged one and I think that it changed to a further dimension of conceptuality. I thus started recruiting models online and instead of real portraits of a family, I took photographs of perfect strangers posing as a family. In other words, I kept exploring the theme of the family as a social phenomenon but with a different approach, taking more and more pictures in places other than my home.

A new interest developed in me since having a child: learning more about the lives of other women. In 2004, I created the work *Sennin bari* (One thousand stitches), which was exhibited the following year. In the center of this artwork, there is an example of what *sennin bari* means. It originated during WWII, when Japanese women created belly belts that had one thousand stitches made by one thousand different women and sent their husbands and sons to the front with these garments. Based on this historical fact, I tried to recreate it on my own shirt. A great amount of labor was involved in making these "one thousand stitches" garments. The women would stand out on the street and ask other women who were passing by to contribute a stitch; they would go around to their neighbors' homes and ask them to also make a stitch for them. I tried this myself and I asked 660 women to help me out. To answer the question as to why it was not one thousand women, there is a little loophole

to the math: women who had a tiger zodiac sign were allowed to make not just one stitch but as many stitches as their age.

My exhibition of *Sennin bari* included a video documentary. I visited an adult day care center situated close to my son's daycare where I had interviews with women who had memories of making these stitches during the war. According to them, there was a superstition that those belts wrapped around their sons, husbands, and fathers' bellies would have protected them from the bullets at the front. The stitch used for these garments is called *tama dome* which literally means "bullet-stop." Of course, this is a superstition among many others that existed at that time, but I realized that those women, who did not have the right to vote, had minimal means of opposing the war. The exhibition *Sennin bari* included also photographs of the faces and hands of 660 women who made the stitches taken with a Polaroid camera. At that time, I discussed about the war with them.

I envisioned this work as a direct response to being pregnant and having my son right around the time of 9/11 and seeing the onset of the Afghanistan war. Somehow the fact that I had just had my son made me envision not just my own life but also the life as my son was growing up and getting older. I was able to have this different kind of imagination picturing my son's life.

After becoming a mother, I had to leave my home and spend some time away from my son in order to make my works. However, in 2007, I went to an art residency in Switzerland that accepted us together. For the first time I was in a situation where I was creating my works having my son with me. There, I created works related to my grandmother who died when I was 14 years old. In 2007, my grandfather passed away and I was gifted some of the material belongings of my grandmother, whom I had lost twenty years before that residency: among them, there were some photographs of flowers she had taken in her garden. It was a great revelation for me. That was because I perceived a great passion behind those photographs taken by my grandmother, but also because there was a vast number of them. There was something very profound

in this, knowing that my grandmother was not an artist but a homemaker. She was a very active woman although she stayed at home, and something told me that had she lived in a different time, she would have gone to work and may have made art as I do. This made me wonder, what is the difference between myself and my grandmother? A part of me felt very sad for her and the life she led.

While I was in Switzerland, I started asking myself what it meant to be recognized by the society and if that was really the only value. Was there a different kind of value for a life such as the one my grandmother had lived? I wanted to know how my grandmother felt, so I decided to take my own pictures of flowers in the garden where I was staying, using the pictures she had taken on the wall for reference. That work was later published as a photobook titled *SWISS*.

In 2014, I was featured in a group show titled *Kakuchō suru fasshon* (literally "fashion expanded." The English title of this exhibition is *You reach out – right now – for something: Questioning the Concept of Fashion*). This was the beginning of a sequence of installations and exhibitions I was offered to be part of. One of the works exhibited at *Kakuchō suru fasshon* consisted of a mirror which was part of the dresser my grandmother left behind and an enlarged photograph of my son which is made of two negatives exposed one on the other. The photograph was actually a photographic mistake of the type you may get when the film does not rewind correctly.

By this time, I had been so accustomed to encountering roadblocks, especially since having my son. For example, I would not have the same time as other artists who were not mothers to focus on my work. Such limitations were so abundant and had become a normal part of my life. Having my son was both a wonderful thing but also a very real and painful obstacle to my work. I realized these were issues in society that I should be exploring more in my work, and I still feel that there really is no reason why raising a child should be this difficult. I have been wondering if it is possible to look at the

limitations that are considered disadvantages in our society, such as not being able to work as much as others, or having children and not having free time, in a different way. I have been wondering if it could be possible to look at working for someone else for free in a more positive way instead of seeing it as an obstacle or lack of ability.

Another interesting aspect of this exhibition is the relation between my works and the frame. When you frame a photograph and it is underneath a plexiglass, that plexiglass to me resembles a mirror. In the work I exhibited at *Kakuchō suru fasshon*, I was playing with this idea by using a real mirror and a real reflective surface in which I am showing my photograph. It is ironic because I knew that if I were considered a very important photographer, I would have received a budget that would allow for non-reflective plexiglass surfaces. In reality, whenever I would be presented in a show, it was very rare that I would even have a budget for the framing. At *Kakuchō suru fasshon*, I didn't receive a budget for the frames either, but the museum decided to let me borrow a pre-existing set of frames that were recycled from a previous exhibition of Joseph Beuys. These were custom-made frames made to fit his posters. Of course, he is a master (laugh).

Other works exhibited at *Kakuchō suru fasshon* included overexposed negatives which would appear blown out and the photograph of a rose in place of the mirror on my grandmother's dresser. The latter is both a work I made in memory of my grandmother and a homage to Joseph Beuys who often used the rose in his imageries. I also exhibited a commemorative photograph of the school entrance ceremony taken with my son, lying on its side: this is a nod to Nobuyoshi Araki, who, in his very first famous photobook *Sentimental Journey*, used his wedding picture laying on its side.

Gradually, as my son grew up, I was once again free to take more photographs in my daily life. In 2016, I had my solo exhibition *Katei ni tsuite/ about home*. The photographs I exhibited there were intentionally chosen to show a version of home that is not what people may imagine, such as a warm

and welcoming place. "Home" is not always secure: things like fire can happen; knives are laying around; I wanted to read a book, but I had to cook, so I took a picture of myself holding a book with a leek . . . All the pictures were in the background of a tent made by my mother and me.

When my mother helped me work on this piece, she had just turned 70. At that time, for some reasons she often talked about how, had she not had me, she would have gone to Paris to become a seamstress there. As a woman, I could easily imagine the kind of regrets she might have had about her life and her aspirations. My mother and I had a complicated past and we were not always close as we are today. I made this tent with the intention of getting to know her better and reconciling with her, at a time when she was old enough to dare to talk about the past but still full of energy. I thought that I would make my mother's dream true by hiring her as an artisan, a seamstress, and paying her for her help to create this tent.

In 2017, I had another exhibition: *Nuu koto, kiru koto, kataru koto* (To sew, to wear, to talk). My boyfriend's mother, who was almost the same age as my mother, created a tarp for this show. It was made during an art residency in Kobe. While I was there, I was asked to create an exhibition and I thought that, because my boyfriend's mother happened to live in that city, I would talk to her about how we could possibly collaborate. What came from our conversation was the idea of this tarp because I was surprised to learn for the first time that my boyfriend's mother had the same dream as my own mother: to move to Paris and to become a seamstress. This idea was probably in fashion at the time they were a certain age. For this work, I asked women from Kobe to donate a piece of clothing that was meaningful to them but that they could no longer use in order to make the tarp. What I offered in exchange for their donation was to take photographs of them wearing those pieces of clothes for the last time.

In 2018, the exhibition *Sakka de, haha de tsukuru sodateru* (To create, to bring up . . . As a mother, as an artist) was held at Chihiro Art Museum. This was the

first time I showed photographs of my son. There was a reason why I had not done this before: I had been reluctant to present photographs that revealed my son's identity. As a mother, I made the decision to not show any photographs of my son until he was a certain age and could give his consent.

In 2019, I had the exhibition *Shiranai kotoba no hana no namae Kioku ni nai fūkei Watashi no yubi ni wa yomenai hon*) (The flower named in an unknown word The landscape not in my memory The book that can not be read by my fingers) at the Yokohama Civic Art Gallery Azamino in which I collaborated with fully blind women. In the photographs I exhibited there, the images captured my family members reading the book I published in 2010 in its braille edition. Kozue Handa, an ICU alumna, was my collaborator for this exhibition: together we envisioned a show with photographs that were accessible and that could be experienced by those women who happened to be blind.

I would like to conclude my talk by showing some photographs from the exhibition *Mae to ima* (Then and now) that I had in 2019 at the Museum of Modern Art, Gunma, in my grandmother's hometown. This exhibition was a two-person show with Kyo Takemura, an artist living in Takasaki City. The theme of the exhibition was related to my grandmother who was born in Takasaki.

At the time I was working on this exhibition, I was inspired by a visit I had to the historical museum which is next door to the Museum of Modern Art, Gunma. The display at the historical museum, where clay pots made by anonymous craftsmen were displayed, spoke to me powerfully. Jōmon pottery is so old that it is impossible to identify its creator, but I later learned that they were made by women. The curator told me that there were two main requirements for the clay pots to be displayed there: the work had to be in good condition, and it had to show the style of the period in which it was created. I found the criteria to be very simple, yet interesting. I felt that the value system that was reflected in the historical museum was lacking in the modern art museum next door. I was very disappointed that the modern art museum's

value system was so male-centric, despite the fact that there were such great values right across the wall, so I thought of bringing the historical museum's value system into the modern art museum. Instead of taking pictures of my grandmother's belongings, "owning" them and using them to show myself off as an artist, I decided to put them into the display cases and show them as they were. I am probably resisting the notion that if an artist creates something then that becomes a work of art that is valued because it has been made by an artist. I found that there is a degree of arrogance involved in that kind of assessment. That was the inspiration behind my show.

In this exhibition, I experimented with a new technique called "photogram," which uses a photographic light-sensitive paper, while employing the dried flowers that my grandmother left behind. Photographs I had taken in Gunma Prefecture, photographs from earlier exhibitions, such as *SWISS* and other old works closely related to my grandmother were exhibited together with her belongings.

I would like to end my presentation with a photograph from my grandfather's one-year memorial.

Thank you!

Anat Parnass is a photographer. After graduating from Tel Aviv University with a B.A. in Japanese Studies, Parnass continued her studies at an Art school, Camera Obscura, studying photography for two years, while working at the Israeli newspaper *Haaretz*. In April 2006, after receiving the MEXT scholarship from the Japanese Ministry of Education, she arrived in Japan. In 2013, she completed her Ph.D. at Graduate School of Arts, Nihon University College of Art with a thesis on contemporary women's photography in Japan. Major photo exhibitions include *Holga De Shinjuku* (2010, Stork Gallery), *Far Away From (Here)* (2011, FOIL Gallery), *Stillness of Night* (2013, Nikon Gallery). She has recently published an article about Yurie Nagashima's photography on *Haaretz* for its Friday supplement

'Gallery.'

First of all, I want to thank CGS for providing us with this platform. I am very, very excited and honored to be on the same panel with Nagashima-san, a photographer that I admire and who was also the subject of my doctoral thesis. The encounter with her works changed my perception of Japanese photography as well as the direction of my research.

I am originally from Israel. I came to Japan for the first time in 1995, and since then Japan became a central part of my life. In 2006, I moved to Japan upon receiving a MEXT scholarship and I enrolled in Japan University College of Art.

Today I would like to start with my ongoing work, *Japan Diaries; Atmosphere of Detachment*, and I will later move on to the main theme of this talk event. *Japan Diaries* for me is actually a diary. I started this project in 2006, when I moved to Japan, by taking photos on a daily basis mostly with my phone. It is very difficult for me to express myself in writing, so for me, photography is a way to express how I experience the world, my feelings, and my thoughts. I am still working on this project and, in a sense, these photographs show how becoming pregnant and having a child changed completely the way I experience the world as well as the way I take photos.

Even though I have lived in Japan for many years, I still cannot fully understand its culture and while I am still very fascinated, there are times when I feel very frustrated too. The vagueness of Japanese culture, perfectly expressed by the word *aimai*, makes me feel that the longer I stay in Japan, the less I understand this country, its culture, and sometimes its people too. My photography, both when I use my professional camera or my smartphone, helps me overcome those moments of frustration when I cannot or maybe I do not want to fully understand.

Generally speaking, Japan is a very photogenic country. During my first years in Tokyo, I felt like I was living in a huge labyrinth where at every turn

I took, I could find a whole new world. I have also been fascinated with sumo wrestlers, food, trains, etc. I think that for photographers, Japan is like heaven on Earth. I started taking photos with my small cellphone. This was before taking photos with smartphones became a common thing, and in a sense, I was lucky because nobody paid attention to what I was doing, so I could just really catch people and situations in the real moment.

One of the photos included in *Japan Diaries* shows a child sleeping and I distinctly remember when I took this photograph: at that time, I was forty and I had thought I did not want to have children for different reasons. But when I took that photograph, I thought, "Do I feel really complete? Am I really sure that I don't want to become a mother?" This happened a few months before I got pregnant.

The reason why I decided to have a child is that I met a person who made me feel like I wanted to become a mother. I love my daughter and I am happy to be her mother. Nevertheless, even now when I hear other women saying that they do not want to have children, I can still understand them. Sometimes I find myself in discussions with other mothers who believe that every woman should become one and that if you do not have children, you are not fulfilling your destiny as a woman. I disagree: becoming a parent is a huge responsibility that not everyone can fulfill.

Until I became a mother, I used to go to shoot fireworks every summer and I created a series of photographs called *Hanabi* (Fireworks). I was very fascinated not by the fireworks themselves, but by the people who go to watch the show, the gatherings, and the atmosphere that you have there.

As a photographer, I am extremely fascinated by the light and I used to take a lot of my photographs at night, with the natural light without using any flash or tripod. I find that there is a lot of light in the dark. At that time, I used to check the sky and leave my house to take photos around Tokyo and in its surroundings. Many of those photos have been included in the series *Yakei* (Night Landscape).

I took those photographs until 2015. Of course, I could not do it anymore once I became a mother: as a single parent living far away from my family, it was impossible to leave the house in the middle of the night or go around the city with my equipment and the baby. At that time, I almost completely stopped taking that kind of photographs, which was very frustrating. I used to take photos in a very specific kind of atmosphere that I was inspired by, but suddenly I felt like that inspiration was taken away from me. Once my child was back from daycare, I could not leave my home which started to be like a prison. Especially during the first two years after my child was born, it was extremely hard for me, and I felt like my freedom had been taken away. At times it felt almost claustrophobic.

Moving on to the main topic of my lecture, when we discussed the theme of today's talk, I thought that I wanted to share the difficult aspects of pregnancy and motherhood that not many women have the courage to talk about.

I cannot explain in words how happy I was the day I found out that I was pregnant. Yet, at the same time, I was already terrified at the idea of giving birth. During the time that I was pregnant, I did not get the help that I needed. So many times I tried to share my fears, but doctors kept telling me, "This is nature, everyone suffers. You have to embrace it!" However, for me it was something absurd. During my pregnancy, I was in panic, thinking,"How am I going to take this child out of my body?" Around the third month of my pregnancy, I started experiencing tinnitus, probably as a consequence of pregnancy-related stress.

My body started to change, and I felt like I was losing control of it as if it did not belong to me anymore. It was not a pleasant feeling for me but when I tried to explain it to those friends of mine who had already given birth, they could not understand me and kept saying that they felt sexy during their pregnancies, that it was an amazing experience. Well, not for me. It was not amazing at all.

Unfortunately, there were not many people I could share those thoughts

with. I think that in our society there is no space for those women who have negative feelings about how their bodies change during pregnancy, who do not feel sexy and happy. I thought I could get used to those changes, but I did not: the bigger I became, the more stress I felt.

As I was struggling with my body, I also realized that in many ways Japan is backward when it comes to pregnancy and childbirth. From the very beginning of my pregnancy, I knew that I wanted to get an epidural, a practice that is still not quite common in Japan. This is due to the belief that women should endure the pain in order to become loving mothers. It was really disturbing that someone else could take such a decision regarding my body and I struggled a lot trying to explain to the doctors that I did not want to feel the pain, that I was terrified by the idea of pain.

Taking photographs of my body while it was transforming was thus a way to understand those changes and make sense of what was happening to me and around me. The first trimester of pregnancy was extremely hard: I could barely move because of the strong morning sickness I was experiencing, and I was all by myself. Around that time, I lost my father, but I could not go to Israel to attend his funeral because of my physical condition. During this period, I started taking photographs of the material objects that were part of my life as a pregnant woman, as well as shoots of new spaces where I was spending most of my time: the hospital and my home.

When I started to feel better, I went to Israel and spent two months there. After the morning sickness was gone, I told myself to keep on traveling and taking photos of my pregnancy in different places, as a way to ease the anxiety I was struggling with. As the due date was getting closer, I was in a chaotic state of mind. Taking photographs helped me a lot at that time too, so I kept traveling around Japan with my belly getting bigger like it had a life of its own.

While I started thinking about what raising my daughter in Japan would mean in terms of the linguistic and cultural barriers I might face, my body kept changing and the creature inside of me started moving. I did not know how

to feel about those sensations, and I was frightened at the idea of childbirth.

Finally, the day I gave birth to my daughter Asa arrived. It was a nightmare, even though I was expected to be happy. It took almost two days for me to give birth, during which I kept taking photographs of my painful delivery, of my fears and distress. My mother was there with me. As we arrived in the delivery room, I set a tripod with the camera and started to take photos of the almost 48 hours I spent in that room.

I kept taking photographs after I came back home with my daughter. That was not *our* house yet, it was *my* house. It took me time to build a connection with my daughter. It always takes time and sometimes it does not happen.

I took those photos because I know that there are other women that feel the same way about their pregnancy, and while hospitals provide regular checkups over nine months, women rarely receive the mental health support they need during pregnancy and after giving birth. Becoming a mother is a process, and I think it took me two years to understand how to become one. You feel so lost sometimes, under the pressure of social expectations. Thus, having a platform where I can show those photos and we can discuss such issues is extremely significant to me.

Now that I am a mother, taking photos as I used to do in the past has become more difficult, especially when it comes to shooting at night spontaneously. When Asa was still a baby, carrying heavy equipment and a camera was a difficult task. Soon after she was born, I realized I had to get a lighter (professional) camera in order to be able to carry it with me when leaving home with a little baby and her "equipment." In a way, my photography changed completely after I gave birth to Asa and I had to rethink myself as a photographer. Luckily smartphones with their high-quality cameras are a huge help. The subjects of my photography changed too. I would like to conclude my lecture by showing a new series of photos that I have been taking for four years which features my daughter in the elevator.

Thank you!